

■長岡半太郎 日本初の世界的物理学者。土星型原子模型などで注目され、長期にわたって学術行政を推進した。

ながおかはんたろう

薩摩藩士密航1865＝ 大村藩藩士の長男に生まれる。

明治維新・ 1868＝ 3歳：
戊辰戦争終・ 1869＝ 4歳：父治三郎が貢士として東京に出府。

明治6年政変 1873＝ 8歳：父が旧大村藩主に従って欧米視察に出る。
佐賀の乱・ 1874＝ 9歳：一家とともに上京、湯島小学校に編入学するも、
初の民間工場1875＝10歳：この頃、落第。のちの大型晩成論につながる経験となる。

西南戦争・ 1877＝12歳：東京英語学校へ入学。
父の転勤で一時大阪英語学校へ転校したあと、

東京大学予備門へ入る。

明治14年政変1881＝16歳：
新体詩抄・ 1882＝17歳：東京大学理学部へ入学、
岩倉具視没・ 1883＝18歳：物理学科に進学。病気で休学した際に、東洋人の適性に悩んだが、中国古典中に科学的業績の多いことに自信を得て、科学史に興味を抱くようになる。仁科学校が文部省より二等褒賞、理化実験器具を受賞。
C.G. ノットの指導の下で全国地磁気測量に参加。

国民之友始・ 1887＝22歳：卒業して大学院進学。
初の対等条約1888＝23歳：*磁気歪の実験研究を行って最初の論文を発表、ノットの紹介で英国学術雑誌に掲載され、W. トムソン(ケルビン)からも注目を浴びた。

帝国憲法発布1889＝24歳：
帝国議会始・ 1890＝25歳：帝国大学理科大学助教授。
大津事件・ 1891＝26歳：父が死去。論文「屈折した面の穴より起る回折」で、
大本教・ 1892＝27歳：箕作麟祥の娘操子と結婚。理学博士。
郡司千島探検1893＝28歳：ドイツへ留学し、H. L. F. vonヘルムホルツ、L. ボルツマンに師事。
日清戦争始・ 1894＝29歳：
白馬会・ 1896＝31歳：スイス・フランス・イギリスなどを回って、帰国。帝国大学理科大学教授となり、本多光太郎らを指導して磁気歪研究を発展させ、
1898＝33歳：のちに“長岡本多効果”と呼ばれる現象を解明、以後、共著論文を続々と発表して行く。

ピアノ国産化・ 1900＝35歳：パリでの第一回万国物理学学会に招かれ、磁気歪について講演。原子構造の問題に強い関心を持ち始め、
田中正造直訴1901＝36歳：物理学科が理論物理学科と実験物理学科に二分される。
教科書疑獄・ 1902＝37歳：長岡との連名で本多光太郎が“銅, Ni, Co, Ni鋼の磁歪”を発表。
日比谷公園・ 1903＝38歳：*J. C. マクスウェルの土星の環の研究にヒントを得て、土星型原子模型を提出、
日露戦争始・ 1904＝39歳：イギリスの雑誌に掲載されて、各国から注目集め、以後、磁気歪の研究を止め、数理物理学研究に専心、
日露戦争終・ 1905＝40歳：この年まで、原子模型に関する論文を集中的に発表。
満鉄発足・ 1906＝41歳：「ラザウムと電気物質観」(新物理学を紹介)。
原子の分光学的研究に進み、水銀などの超微細構造について詳細な実験を行い、W. パウリらの核スピンの提唱の基礎を提供したが、そこから独自の核構造論を展開し、アーク放電による水銀還元実験へと進む。
アラク創刊・ 1908＝43歳：帝国学士院の事業として、伊能忠敬の伝記編纂を提唱、
韓国併合・ 1910＝45歳：

明治天皇没・ 1912＝47歳：
大正政変・ 1913＝48歳：監修で(東北帝大科学名著集)発刊。ニュートン祭で“大型早成説”を訴える。

ロシア革命・ 1917＝52歳：弟子に「伊能忠敬」まとめさせる。理化学研究所設立の中心として、研究員となり、
本格政党内閣1918＝53歳：「教授の黜陟(ちつちよく)論」。
ベルサイユ条約・ 1919＝54歳：

原敬首相暗殺1921＝56歳：
水平社結成・ 1922＝57歳：理研内に研究室を開設、多くの研究者を育てる一方、

護憲三派圧勝1924＝59歳：水銀の還元実験成功を学会報告するなどのトンデモ事件も。

円本時代始・ 1926＝61歳：定年退官。

共産党事件・ 1928＝63歳：

満州事変・ 1931＝66歳：大阪帝国大学初代総長。

帝人疑獄事件1934＝69歳：貴族院議員。

二二六事件・ 1936＝71歳：「随筆」。
日中戦争始・ 1937＝72歳：第1回文化勲章受章。

第二次大戦始1939＝74歳：貴族院で天才教育論。*以後10年間、学士院院長をつとめ、
大政翼賛会・ 1940＝75歳：設立され全日本科学技術団体連合会の理事長となって、
日米開戦・ 1941＝76歳：

敗戦・ 1945＝80歳：
新憲法公布・ 1946＝81歳：
朝鮮戦争始・ 1950＝85歳：没した。

板倉聖宣「かわりだねの科学者たち」、「没年日本史人物事典」、「日本の群像」、平凡社百科事典、山田風太郎「人間臨終図巻」、「目でみる日本人物百科」、